



Initiatives of Change  
一人ひとりのチェンジで信頼を築く

# IC ニュース NEWS

Vol.39

公益社団法人 国際IC日本協会

発行年月日 2023年12月20日  
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会  
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20  
パレ・エテルネル206号  
TEL: 03-6273-1428 FAX 03-6273-1429  
E-Mail: info@iofc.jp HP: http://iofc.jp  
<International IofC> HP: www.iofc.org

頒価 1部 200円

## 有事こそICの出番 会長 藤田 幸久

コロナ禍、ウクライナでの戦争に加えて、中東での戦争勃発で地球全体が「有事」状況に突入しました。

遠くの問題、持病を持つ人などの「他人事」であった多くの問題が私たちにとって「自分の問題」となりました。

世界の中で日本は例外的に「平時」が続いた社会です。私の IC/MRA との出会いは MRA の国際親善使節 Song of Asia でアジアの青年達と各国を歴訪した時です。当時アジアで植民地化の経験と国内紛争が存在しないのは、日本とタイのみでした。

戦後と高度成長期に日本が平時を謳歌できた陰に IC 関係者の貢献があります。戦後の講和条約締結、アジアや米国との和解、険悪な労使関係の改善、貿易戦争への対応、日本の孤立化を救った難民や元捕虜などの戦後補償問題への対応などです。しかし、その後 30 年以上も平時が続いた日本においては、IC/MRA の貢献の場が減少したと言えます。

今や、世界中で家庭、企業、行政、政治におけるモラルが劣化し、分断や格差が拡大して争いの温床となっています。

この分断された世界に信頼と和解をもたらす活動に加え、日本社会の格差や疎外、心の拠り所を求める人々

にお役に立てる活動を再生する時と思われれます。IC は、かつてほどの力はないものの、有事に役立つ経験やネットワークをもっているからです。有事の問題とは、その国や社会に潜む根本問題と、その結果出現する争いや感情の対立などです。

生き物のように現れる様々な問題やニーズをキャッチする感受性を持ち、お役に立てるイニシアチブを地道に展開していきたいと思えます。

有事の今こそ IC の新たな出番の時です。皆さんの身近な問題やニーズ、そして、皆さんにどんな貢献ができるかのヒントも是非お寄せ下さい。



Imad Karam 博士 (左、前国際 IC 専務理事、英国在住パレスチナ人)

## 真の公益事業に向けて ～第45回 IC 国際フォーラムをおえて～ 理事 佐々木 淳

本年の国際フォーラムは、原点に立ち返り、私たちの仲間である日本の会員の中で、チェンジを体現し、日々生きておられる石井統市さんをお迎えし、お話を伺いました。テーマも「介護」という、これまでとは一味違ったものに据えて、今後、日本から世界に向けて発信できるテーマで、学びあうことができたと思います。この意味において、本フォーラムは、当初の目的を捉え、成功であったと思います。石井さんをはじめ、皆様のご協力のお陰と感謝申し上げます。

ただし、これが本当に「公益」に資する「事業」であったか、と考えると、それはまだまだ疑問です。これまでは、過去の経験をもとに、これぞ IC だ、というものを表現する場になってはいなかったのでしょうか？ 真に、公益に資する事業とは、自分の過去の体験や、言いたいことはさておき、移り変わる時代に対し、現在と未来の社会を見据え、考え抜き、それを発信することと考えます。時には、過去の自分からすると、気持ちのよいものではないかも知れません。しかし、それを受け入れることこそが、「チェンジ」そのものではないでしょうか？

ないでしょうか？

例えば、過去のコーでの経験や、過去に自分が関わった人たちの話題を頻繁に見聞きます。公益を考えるのであれば、強い言い方をすれば、このような部外者が疎外感を感じるような話をするのはご法度です。これが IC だ、というものを見せる、という気持ちなのかも知れませんが、受け手からすれば、多くの場面でそうはなっていません。同窓会に迷い込んでしまったような、意味のわからない自慢話をただ聞かされているような気持ちになります。

そのような話が不要で、禁忌だ、ということではありません。公益事業という場にはそぐわない、という一例です。重要なのは使い分けです。公益事業においては、会員は、今回のフォーラムのように、発信側です。自分の過去の理想をただ表現するのみならず、社会と未来をよく見据えて、真の公益とは何か、客観的な評価軸を持って、「事業」を組み立てていくことこそ、我々に必要な未来です。

## 「第45回 IC 国際フォーラム」に参加して（参加者の感想）

### ◆田中 章博

地下鉄「江戸川橋駅」より平坦な歩道を10分ほど歩くと右側に鳩山会館と書かれた門構えが目に入った。中に入っただらかな坂道を登り、そこからさらに左、右と曲がりながら急こう配を登ってゆくとやっと古風な感じの鳩山会館にたどり着いた。鳩山家が日本の近現代史上政治の世界で重要な家系であり、二人の総理大臣を生んだ家であったことを思うとその建物に風格が感じられるようであった。MRA 創始者フランク・ブックマン博士が1956年鳩山一郎首相に迎えられたのもこの建物であったと思えば威儀を正して入らなければいけないと緊張した。

フォーラムは歯切れのよい佐々木理事の開会宣言に続いて藤田会長より鳩山会館の丁寧な説明があり、続いて IC 会員で当日の講師石井統市さんから「介護から考える日本

の将来」のテーマでプレゼンテーションが行われた。石井さんは定年退職後通学して正式に介護福祉士の資格をとり現在介護施設で働いておられ、要介護者を移動させるときの体の使い方などをジェスチャー入りで説明された。またすでに高齢化社会に入っている日本で今後ますます増える認知症を抱える高齢者の介護がいかに重要であるかを力説された。その後小グループごとに静かな時間とグループ内のディスカッションが行われた。

今回は外国人参加者がいない「IC フォーラム」であったが、そのテーマ内容は海外諸国にも通じるものがあり、日本での介護制度の在り方を成功させてそのノウハウを積極的に海外に紹介できるようにしたいものと思った。

### ◆足立 憲昭

今年の国際フォーラムは、文京区の鳩山会館で開催され、セミナー会場は庭園を臨める心が落ち着く雰囲気でした。今回のテーマは、「介護から考える日本の将来」でしたが、例年と大きく異なるのは、日本人中心の日本語による、「日本の重要課題」を話し合ったことです。今回の思い切った変更は、「日本の置かれている厳しい現状」を深く知り、自分自身の「身の回りに起こっている切実な課題」を深く話し合いたいという思いと感じました。

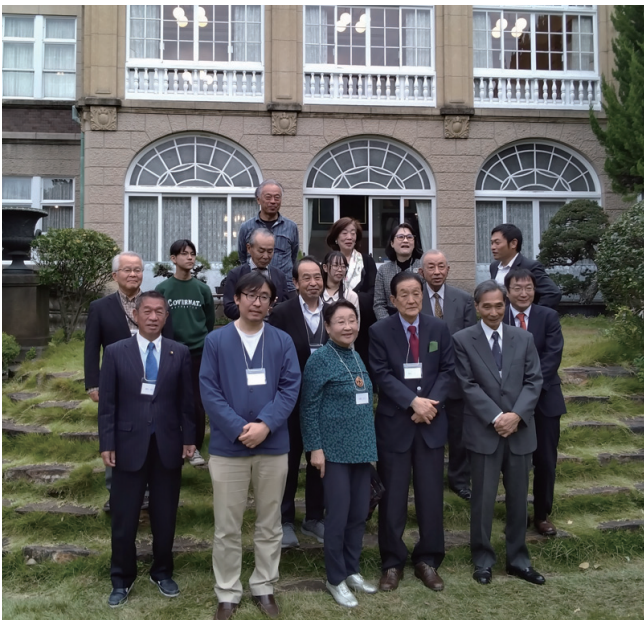
講師の石井統市さんの話から、まず気づいたことは「団塊の世代」が後期高齢者となったこと、長く日本国家を支えてきたと「自他ともに認める」団塊の世代が、遂に支えられ、そして人生の最後を迎えようとしていることです。次に気づいたことは、「介護は自律した人々が、相互扶助すること」が最も大切であり、自らが「フレイル予防」に努力しながらも、不足する部分(老化が原因)を遠慮せずに、周りの人々の支援を受けること。「フレイル予防」には、良い食事、良い運動、良いコミュニケーションが求められ、「可能であれば、最期の瞬間まで現役で社会に役立つ」を目標とすべきことでした。



会場風景

最終的に気づいたことは、コロナ禍が終わり、「ウクライナ紛争やパレスチナ紛争」が世界を不幸な状態に追い込んでいる中において、「日本国家」が勇気を持って自律(米国依存・借金依存の脱皮)すること、そして、日本人ひとりひとりが、「利他の精神」で介護問題を捉えながら、その先には、「世界に役立つ日本国の一員(日本人)となる」ことの目標が待っていること。

最後に、このような重要な気づきを与えてくれた、「今回の国際フォーラム」を運営された皆様に、心から感謝申し上げます。



集合写真



講師石井氏

## ◆香川 康之

石井先生の他人を楽しませながら、相手のことを冷静に見て対応していく姿勢について、周りを巻き込んで世の中を変えていくリーダーの姿を見ました。

相手の尊厳を尊重して、それでいてさりげなく大事なところを手助けするということは中々出来ないと思っております。それを、年齢が70歳を超えられても、体力的、精神的に可能にするバイタリティは過去に培ってきた活動の賜物だと感嘆いたしました。

人として相手に接する上で大事な、相手を敬い、共感して、明るくコミュニケーションの秘訣は、接する相手に対する大きな敬愛だと感じました。

## ◆豊田 直之

今回、ひょんなことから全くの部外者である私が国際フォーラムに参加することとなり。さらには感想文を書くことになりました。

今回のテーマである「介護から考える日本の将来」はとてもいいテーマであったと思います。また、会場も鳩山会館はとても良かったと思います。ただ残念だったのは、会場よし、テーマよしであるのに、国際IC日本協会の会員の方しか参加されていないこと。しかもかなり限られた方たちになってしまったとうかがっています。会員以外の方

## ◆朝原 直人

通算45回目となるIC国際フォーラムは、『きっと楽になる家族介護のすすめ』著者の石井統市様をゲストにお迎えし、鳩山会館にて開催されました。

石井様の長年の、介護施設での実体験に基づいたお話、とても興味深く拝聴いたしました。

中でも強く印象に残っているのは、先程ご飯を食べたばかりなのに「まだご飯を食べていない」という認知症の入居者の方に対して、そのことを否定せずに「いま、お米を用意していますから、しばらく待っていてくださいね」とお声かけをした、というお話です。

いま用意してますからね、といわれたことでお相手が安心して、実際にはしばらく待っている間にそのやりとり自体を忘れてしまう、と。

私が同じ状況に遭遇したら間違いなく「さっき食べたで

国際フォーラムでお話を頂いた中で、「日本の高齢化は、別に恥じる事はない。先人達の弛まぬ医療における革新の欠陥である。高齢を楽しむ社会を構築すべき。」という至言も聞いて感銘を受けました。

私も今後、石井先生から刺激を受け、自分にとっても「明るく、相手への共感と尊敬」を忘れないように変わって行ければと思います。

また鳩山会館という非日常の空間でフォーラムに参加出来ました。企画をして頂いた方々のご尽力に御礼を申し上げます。

たちにも大きく門戸が開かれ、日本人のみならず、日本在住の外国人、海外からの出席者などもいて、そこで初めて国際フォーラムと位置付けられるのではないのでしょうか？

介護というテーマは誰もが避けては通れないことですし、世界共通のテーマであるはずですが。フォーラムで、さまざまな事例からどのようにすべきなのかが多くの方たちから問われ、よりよい社会にするためにもより多くの方たちが参加できるような国際フォーラムであることを期待したいです。

しょ！」と怒ったり、「さっき、ご飯とお味噌汁を食べたでしょ」と優しく諭してみたりして、それでも通じずケンカになっていたと思います。

ご飯を食べたか、食べていないかという事実よりも、「今のお相手の認識を否定しないこと」が認知症の方と接する上では大切なのだと、目から鱗が落ちた感覚でした。

石井様のお話のあとのテーブルディスカッションでは、上記の感想をシェアさせていただきました。

自身が介護を必要とする状態にならないように日々努力されている方、現在まさに介護を行なっている方、親が介護をしている姿を見てきた方、様々な立場の方の考えを共有することができ、とても有意義なディスカッションタイムでした。

## 事務局からのお知らせ

早いもので、今年も師走となりました。皆様には、慌ただしさを感じつつも、お元気でお過ごしのことと存じます。

写真の本は、今年のIC国際フォーラムで基調講演をお願いした会員の石井統市氏のご著書です。この2冊の本の内容が当日の講演のベースとなりました。

「きっと楽になる家族介護のすすめ」

2020年11月初版発行

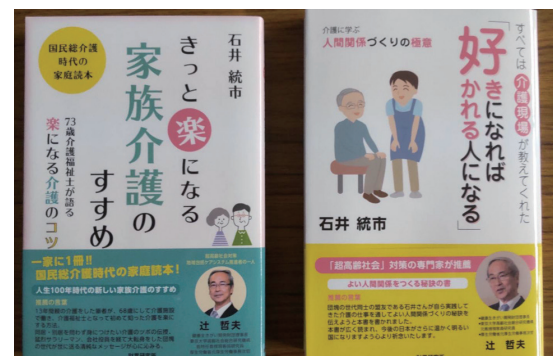
「好きになれば好かれる人になる」

2023年10月初版発行 出版社：(株)財界研究所

本についてのお問い合わせは、事務局までお願いします。(info@iofc.jp) 事務局は、年末から会員総会の準備に入りますが、今年は役員選挙の事務も重なり、忙しい年末年始となりそうです。

皆様、良いお年をお迎えください。

(事務局は、12/29(金)～1/4(木)の間、年末年始のお休みとなります。)



世界道徳再武装(MRA/IC)韓国本部が8月、韓国・ソウルで「東北アジア青少年フォーラム」(日中韓学生フォーラム)を開催しました。私自身も大学生のときに計3回参加したプログラムで、私がそれまでもっていた中国や韓国に対するイメージを大きく変えた機会でした。国際交流の経験を日本の学生に提供するお手伝いがしたいと思い、留学で韓国に来た2018年以降は運営スタッフとして関わっています。

今年のフォーラムは新型コロナウイルス感染症のパンデミック以降、4年ぶりの完全オフラインでの開催となりました。開会式では、日中韓の政府間協議や交流事業を運営する国際機関「日中韓三国協力事務局」(TCS)のオウ・ポーチエン事務局長(当時)が基調講演を行い、中国の邢海明(シン・ハイミン)駐韓国大使が開催の祝辞を寄せるなど、豪華な名前が並びました。

同フォーラムでは毎晩、公式スケジュールの後に有志が集まって政治や歴史の話をするのが恒例となっています。メディアの報道ではなく目の前にいる友人から直接話を聞くことで、社会の課題を「自分事」として考えることが目的です。気になることは何でも聞いていい、相手の話を遮らない、人の話を否定せずにそのまま受け止める——。私がI of Cの活動を通じて学んだことを説明した上で、対話の時間を持ってもらいました。学生たちは毎日夜遅くまで、韓国式かき氷や豚足などを食べながら交流を楽しめたようです。

また私個人としてはフォーラム期間中、日本からいらした藤田会長に同行して関係各所を訪問しました。車総裁と3人で、東レの韓国子会社である東レ尖端素材にも訪れました。紹介を受けて

たまたま訪ねたにもかかわらず、I of Cと東レの歴史的なつながりがあることを藤田会長から伺い、不思議な縁を感じました。

これまであらゆる日韓の交流プログラムに参加してきましたが、それらのほとんどに、世代の異なる存在を疎外する傾向があると感じています。交流事業の対象は学生のもが多く、楽しかった学生時代の思い出の一つとして終わってしまいます。またそうしたプログラムでは大概、どこからか突然現れた偉い人が「君たち若者が担っていく未来は明るい！」などと叫んで、若者に何か直接声をかけることもなく去っていきます。もちろん学生間の交流は維持しなければならいですが、社会人になってから、そして異世代間の交流も必要です。これは、国際ICフォーラムやAPYCなどへの参加経験からもっている考えです。今回藤田会長と車総裁の近くで、2人が日韓関係の改善に向けて努力されていることを強く感じました。そんな2人の後ろ姿を見て、自分ももっと頑張らなければと思った夏でした。



## 雑感「南船北馬の日々」 理事 木村 清隆

何をしているのだろうか。立ち止まることなく、駆け巡り、何を求めているのだろうか。正に南船北馬の日々を過ごしております。

10月26日～11月2日：モロッコ王国(アフリカ)、11月7日～10日：バンコク市(タイ王国)、11月13日～14日：松江市(島根県)、11月20日～21日：宇都宮市(栃木県)その他、地元地域活動を行いながら、都内をはじめ関東近県に凡そ毎日訪問させて頂き、様々な会合にて多くの方々にお世話様に成りまして素敵なお出逢いと素晴らしい経験をさせて頂く事が出来ました。

心から感謝を致しております。家内からカレンダーに家に居ない日でなく、居る日に○を付けてと言われるほどに出掛けております。

【モロッコ王国】国際交流にて、成田空港よりUAEアブダビでトランジェットして延べ23時間余りのフライトで機内食を4回食べてカサブランカに到着。マラケシュ郊外での地震災害を視察し、日干し煉瓦での家屋の倒壊、割栗石と泥で固めた3階建の半壊、建築基準に疑問を感じました。その他、皮鞭し作業での視察では匂いが厳しく鼻の前にミントの葉を揺らしながら見学しました。労働環境・条件に様々な課題を考えました。各地を訪問させて頂き、学生なども親しく成る事が出来ました。大都市とサハラ砂漠・山間部などとのインフラ格差がありつつも、見方によってはバランスがとられている様にも感じました。往復の航空路にて中東地域近くを飛んでいるとき、世界平和を衷心から祈りました。

【バンコク市】JAM議員団会議にて空調機器メーカー(日本企業)の工場を視察させて頂き、品質・安全、そして環境に配慮し

た社員教育も行われていました。JETROバンコク事務所(日本貿易振興機構)訪問ではタイ王国内で日本企業が活発に取組まれ活躍されている説明を受けました。街中は大変に活気があり日本人に対して大変に好意的でした。

【松江市】JAM議員団西日本エリア会議に出席にて、過疎・人口減少への挑戦に取り組む地域を視察。

【宇都宮市】JAM議員団東日本エリア会議に出席にて、芳賀・宇都宮LRTにおける街づくり、全国トップクラス「暮しやすしい」「発展力のある街」と評価されており参考に成りました。

小生、日頃より素敵なお出逢いと素晴らしい経験をさせて頂けることに感謝を致しております。つくば市議会議員として職務遂行しながら、神社責任役員総代・インターナショナルスクールの評議員など地域諸活動をはじめ、公益社団法人国際IC日本協会に関わらせていただき幸いです。居住地域から市・県・日本国、更に世界の平和を祈りながら、東北アジア地域において「文化同盟的」な取組が大切ではと考えております。その為には自国の日本国の伝統文化を理解し隣国の文化を理解し合うことで、平和につながると考えます。和食・中華料理・朝鮮料理、それぞれの芸術などの観点から笑顔で話し合え幸せを分かち合って、それぞれの課題に理解協力が出来る関係を創る取組が出来たらと考えております。その為、今の日本社会は日本国の文化に希薄を感じます。外国からの訪問者の方々の方が勉強されている様にも感じます。従来取組んで来たIC学校訪問の取組を考えると、今日の国際交流環境は大きく変わりました。小中学生がタブレット端末を活用し世界の情報も身近に感じられ、街には外国人旅行者をはじめ各国の方々に出逢う機会があふれております。国際交流に関する団体も様々な取組がなされており、国際IC日本協会として取組む学校訪問は新たな取組を考えると時勢が思われます。国際社会だからこそICの正直、純潔、無私、愛、の絶対道徳標準を大切にしながら、日本の伝統文化を大切に日本の子供たちと外国の皆様を紹介し理解して頂く事も大切ではと考えております。

小生、微力ではございますが国内外の様々な方々と出逢い、経験をさせて頂きながら、国際IC日本協会の取組を通じて、居住地域から市・県・日本国、更に世界の平和につながるお手伝いが出来たら幸いです。

みんなの幸せのモノサシに違いがあるかもしれませんが。しかし笑顔は皆同じです。みんなの笑顔が見たいから、わたしも笑顔で頑張ります。



地震被害の拡大写真

モロッコ地震の被害